木枯し紋次郎シリーズ

夜泣石は霧に濡れた

笹沢左保

講談社

夜泣石は霧に濡れた
昭和四十七年十月二十日第一刷
著者＝笹沢左保
発行者＝野間省一
発行所＝株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一大代表　振替東京三九三〇
印刷所＝豊国印刷株式会社
製本所＝黒柳製本株式会社
定価＝五〇〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©笹沢左保　一九七二年

0093-301338-2253（0）　（文2）

新潮文庫

運命峠

前編

柴田錬三郎著

画　岩田專太郎

装幀　山内　暲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

獣道（けものみち）に涙を棄てた

1

膝を合わせていたのは、一種の気取りであった。白昼である。その上、野外だった。それに、道ならぬ仲とは一目で知れる男女の取り合わせなのだ。人目を憚ると同時に、女は自分に対する照れ臭さを捨てきれない。初めてそうするのではないのだろうに、形だけ男に逆らって見せるのだった。

しかし、そんな抵抗は所詮、長く続かないものであった。肉体に直接、甘美な感覚が伝われば、気持のほうはすぐ処理されてしまう。男の右手が、女の衿の奥へ忍び込む。衿元を押し開くようにして、男の手が女の豊かな胸の隆起を誘い出す。陶器のように白い乳房が、微かな震えを見せてこぼれ出る。

淡紅色の蕾が、小さかった。子を生んだことがない証拠であり、いかにも敏感そうな乳首だった。男の指がその蕾を弄び、やがて掌でふくらみ全体を揉みしだく。女は後ろ手を突き、白

い顎を見せてのけぞった。男が女の顔を追って行き、唇を重ねた。
女の喉が、何かをのみ下すように動く。舌を吸い合っているのだ。そのあたりから、女の閉ざされていた膝が徐々に開き始める。重なっている着物の裾が、それに伴って離れて行く。白い脛が覗く。着物の裾が片方ずつ、右と左に落ちる。
光沢のある膝頭が、間隔を置いて並ぶ。更に下腹へかけて、着物の裾が割れて行った。太腿がそっくり、その付け根まで剝き出しになる。日溜まりの中で、眩しいくらいに白い下肢であった。女は、餅肌であった。三十前の女盛りである。
子を生んだことがないせいか、肉に張りがあった。むっちりとしていて、脂が乗りきっている。女はそこで、再び膝を合わせた。そのまま揃えて倒し、思いきり膝を折り曲げた。それは、悶えであった。早くもわれを忘れかけ、じっとしていられなくなったときの女が示す動きなのである。
男は、六十に近い。髷も半ば、白くなっている。大店の主人という感じで、それなりの気品も貫禄もある。着物も羽織も、安物ではなかった。裏白の足袋だけが、何となく野暮ったい。草履は、脱げてしまっていた。三十前の女とは、親子ほどの年の違いがある。
女のほうも、決して粗末な装りではなかった。水商売ふうではない。商家の女房であった。そうした男女が白昼、野外で慌ただしく睦み合う。住まいは、あまり遠くないところにあるの

だ。そこから二人は、人目を忍んでここへ来たのに違いない。それだけわかれば男と女は、舅と嫁の間柄だと察しをつけるのに十分すぎるくらいだった。

いつの間にか、女は枯れ草の上に横たわっていた。その髷が崩れないように枕代わりに左腕を貸してやり、男は半ば女の上に被いかぶさっていた。女はさすがに、男の首に腕を巻きつけたりはしなかった。両手を、腰のあたりに置いている。

「寒い……」

女が、着物の裾に手をのばした。

「すぐ、汗をかくほどにしてやるさ」

男は素早く、女の手を押さえた。空は晴れ渡り、柔らかい日射しが地上に溢れている。そこは、崖の斜面にできた窪みであった。崖の上は、桑畑である。崖の斜面は、寝転んだ人の姿を隠すほどの丈はある枯れ草で、被われている。

斜面を下りきったところを、底の浅い小川が流れていた。川の向こうは、丘陵であった。雑木が、密生している。窪地は、四方を囲まれていた。人目ばかりではなく、風まで遮られている。温い日溜まりに見えるし、太陽は真上にある。

だが天保十年十一月、霜月ともなれば屋外はやはり寒い。まして女は、半裸の状態にあるのだった。照れ隠しに、寒い、ぐらいのことは口にしてみたかったのだろう。そのくせ女は、う

っとりと目を閉じているのだった。小ぢんまりと整った顔で、色も白いからおとなしそうに見える。とてもこんな大胆なことをする女とは、思えなかった。

「明日は、江戸から帰りますね」

女が、目を閉じたままそう言った。

「忠七がかい」

男はまた、女の胸のふくらみに手をのばした。

「ええ」

女は、緩やかに首を振った。せつないという意味か、夫が江戸から帰って来ることを嘆いたのか、そのどちらかであった。

「年が改まったら、また当分は江戸へ出すことになるだろう」

男は、忠七という息子のことを、大して気にもかけていないようだった。

「それまでは、ずっと嫁でいなければいけないんですね」

「仕方がないじゃないか」

「でも、辛くて……」

「わたしが、味を覚えさせたんだと言いたいんだろう」

「でも、本当にそうなんですから……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「忠七のやつ、三十五にもなりおって、どうして嫁を一人前の女にしてやれんのだろう」
「もう、駄目です」
「わたしを、知ってしまったからかい」
「はい」
「可愛いことを、言うてくれる」
「どうにか、ならないものでしょうか」
「まさか、わたしとお前が夫婦になるわけにはいかんだろう。そりゃあ、忠七のおふくろが亡くなってからのわたしは、独り身には違いない。しかし、加納屋善左衛門が伜の嫁を寝取ったとあっては、世間さまが承知しないだろうよ」
「わかっています。ただ苦しくて、せつなくて……」
「わたしだって、同じ気持だよ。だからこうして、奉公人たちの目をかすめて……。お前が、いとしゅうていとしゅうて、ならないんだよ」
「早く……」
女が、男の胸に顔を押しつけた。
「食べてしまいたいくらいだ」
男も女の身体を開きながら、息を弾ませていた。女の姿が、男の下に隠れた。白い足袋をつ

けただけの女の脚が、妙に艶めかしかった。その白足袋の親指の部分が一瞬、弓なりにそり返った。足首から先が、絶え間なく左右に動き続ける。時刻は九ツ、正午をすぎたばかりであった。

上州は、藤岡である。中山道の本庄宿から下仁田寄りへ、二里半ほどはいったところだった。藤岡は宿場よりは市場町として知られ、現金が動くことで活気のある繁栄を誇っていた。その藤岡宿の中心部から、ほんの少しはずれただけで、こうした密会に相応しい場所が見つかるのであった。

それは、地形に原因があることだった。当時の町の特徴は、あくまで街道を中心にしている点にあった。街道沿いに、人家が密集するのである。つまり、町には幅というものがなく、長さだけがあるのだった。例外は、城を中心とする城下町だけであった。

従って、宿場として盛っていれば、それに比例して町並が長くなる。宿場には普通、裏町や裏通りがないわけであった。だから、街道沿いに宿はずれまで行くのは大変だが、裏へ出れば見渡す限りの田園風景が広がっているということになる。

藤岡の場合も、そうであった。家の裏側へ抜けると、眼前に桑畑の多い視界が展開する。すぐ東を神流川が、流れている。山々は遠く西に妙義や浅間、北に赤城と榛名を望むことができる。南には、秩父の山が波打っている。近くには、なだらかな丘陵地帯しかなかった。加納屋

善左衛門が息子の嫁と密通に及んでいる場所も、藤岡の町とはつい目と鼻の先であった。

それでいて、人っ子ひとりいない。加納屋善左衛門も息子の嫁も、そう信じきっていたのである。これまでが、無事にすんで来た。まだ一度も、人目に触れたことがない。それは、この崖の斜面の窪地は大丈夫だという自信があったのだ。ところが、絡み合っている二人から十メートルと離れていない地点に、人がいたのであった。

小川の向こう側である。やはり枯れ草の中に寝転っていた。加納屋善左衛門たちが忍んで来る以前から、そこで眠っていたのだった。善左衛門たちによって、起されたようなものであった。目を覚ましてからも、その場を動こうとはしなかった。

善左衛門たちの手前、動くに動けなくなったというのではない。立ち上がるのが、億劫だったのである。まだ、寝たりなかったのだ。夜旅を続けて来て、ここに恰好の寝場所を見つけ、横になったのが五ツであった。午前八時である。それから四時間とたたないうちに、眠りを妨げられたわけだった。

渡世人であった。寝姿だけでも、かなりの長身であることがわかる。三十をすぎて、間もない年輩であった。痩せていて、その青白い顔はまるで病人みたいだった。頬が、削げ落ちている。彫りが深く整った顔立ちだが、いかにも全体の印象が暗すぎた。

沈みきっている。のびた月代の下で、鋭く冷ややかな双眸が光っていた。眼差しも、陰欝そ

うであった。何か、虚ろである。何を考えているのかわからない無気味さが、その渡世人の男臭い凄味になっていた。それがまた、渡世人に十分な貫禄を感じさせるのであった。

感情のこもらない目許に、虚無的な翳りが漂っていた。表情が動かないその冷たさに、何者をも拒絶するような男の孤独が感じられた。左の頬に、古い傷跡があった。刀傷の跡だった。傷の両端が引き攣っているが、醜さを感じさせるほど大きくはなかった。

渡世人は唇の左端に、楊枝をくわえていた。長さ五寸、約十五センチほどの楊枝であった。当時、現在の歯ブラシと同じような役目を果していた楊枝で、そのくらいの長さのものは決して珍しくなかったのである。しかし、その渡世人は実用向きの楊枝として、それをくわえているわけではなかった。

爪を噛む癖も同じで、一種の習慣という感じだった。竹を削って作った手製の楊枝で、その両端が鋭く尖がらしてあった。渡世人が眠っている間、楊枝の先端は枯れ草の上に落ちていた。だが、渡世人が目をさますと同時に、楊枝は垂直に立って天をさしたのであった。

振分け荷物の上に、三度笠が伏せてある。風雨に晒されてドス黒く変色し、破れ穴や割れ目が生じている三度笠だった。渡世人は、その三度笠の上に頭を置いていた。枕代わりであった。掛け蒲団の代わりは、泥水や塵埃をたっぷりと吸い込んでいる道中合羽だった。ゴワゴワになって、その道中合羽には厚味ができていた。

黒の濃淡の縞模様は、もう見分けがつかなかった。汚れきっているのだ。何ヵ所かにできた鉤裂きが、無器用に繕ってある。手足につけている黒い手甲脚絆も、使い古された雑巾と変わりなかった。そのせいか、草鞋だけが真新しいものに見えた。

渡世人は鞘ごと抜き取った長脇差を、左腕にかかえ込むようにしていた。見るからに重そうで、頑丈な造りの半太刀拵えであった。錆朱色の鞘を、鉄環と鉄鐺で固めてある。抜かずに使っても、武器として十分に通用する長脇差だった。

渡世人の瞼は、まだ重たそうである。細めた目に真青な空が映っていた。渡世人の位置からは、睦み合っている男女の姿がまる見えであった。下から一直線に、見通せるのだった。しかし、渡世人は重なり合っている男女へ、目を向けようともしなかった。

意識して、見まいと努めているのではない。まるで、関心がないのである。聞えて来るものに対しても、そうであった。女は必死になって、声を洩らすまいと堪えている。男の肩に顔を埋め、口の中へ拳を押し込み、女の慎しみを通そうと懸命になっていた。

だが、それで完全に、消せるものではなかった。甘い呻きや、瞬間的に吐き出す声、それに忙しい喘ぎを女は殺すことができない。男の荒い息遣いにしても、同様であった。それらは距離的にいって、渡世人の耳に当然達しているはずだった。

しかし、渡世人はそれを、聞いていないのである。無理はしていなかった。遠くを眺めやる

ような渡世人の目は、あくまで冷静であった。男と女が死んだように動かなくなり、あたりがすっかり静かになっても、渡世人の表情には何の変化も起らなかった。

逆に、動揺を示したのは、加納屋善左衛門のほうであった。善左衛門は息子の忠七の嫁であるお菊から離れて、身支度を整えながら何気なく小川の向こうへ視線を走らせたのである。善左衛門は愕然となって、お菊の腕を掴んだ。お菊も渡世人の姿に気づき、慌てて後ろ向きにすわり込んだ。

着物の裾の乱れを、直している余裕もなかったのだ。うっすらと汗が浮き、上気したお菊の顔が、一瞬にして蒼褪めた。善左衛門も、顔色を失っていた。何もかも渡世人に見られたり、聞かれたりしたことは明白であった。善左衛門は、このままにしておいたら大変なことになると判断した。

そのとき、渡世人が立ち上がった。長脇差を、腰に落し込んでいる。善左衛門は意を決して、川っぷちまでオズオズとおりて行った。渡世人は、知らん顔であった。善左衛門は、渡世人が口にくわえている楊枝を見た。それで善左衛門は、噂に聞いたことがある渡世人だと気がついた。

「もし……」

小川の向こうにいる渡世人に、善左衛門は声をかけた。声をかけながら、善左衛門は懐から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com